第24回佐賀県総合教育会議（R4.10.28）

１　開会

〇前田政策総括監

それでは、ただいまから第24回佐賀県総合教育会議を始めさせていただきます。

私は、本日進行を務めさせていただきます政策部政策総括監の前田でございます。よろしくお願いいたします。

それでは、開会に当たりまして、山口知事から御挨拶を申し上げます。

２　あいさつ

〇山口知事

皆さんこんにちは。昨日まで２泊３日で、奄美大島で九州知事会議が開催されていました。今日は「ＳＡＧＡ部活」が議題ということでありますけど、島全体が大島高校という高校、鹿児島県立大島高校というのがあるんですが、今まで全部野球部の連中は高校になると本島の方に、鹿児島のほうに行ってしまったんだけれども、みんなでこの島を盛り上げていこうじゃないかということで、みんな大島高校に残ってくれて、春の選抜を勝ち取ったということでフィーバーして、今回じゃなくて、今年の春の選抜でね。夏は決勝で残念ながら負けてしまったということで、今回はソフトバンクにドラフト４位だったかな、ピッチャーが入ったと、そんなニュースで盛り上がっていて、本当に地域、地域が部活で盛り上がるという話がなされていました。奄美の安田市長さんはお母さんが有田の人だということで、佐賀に非常に思い出もあるということで、そういうことで盛り上がりましたけれども。

あわせてですね、ちょうど一つの九州知事会のテーマが「未来人材の育成に向けて」、未来人材ビジョンというのを経済産業省が出していて、そのうちの１つのページに対して私が意見を言ったんですね。何が書いてあるかというと、このページには「現在は「注意深さ・ミスがないこと」、「責任感・まじめさ」が重視されるが、将来は「問題発見力」、「的確な予測」、「革新性」が一層求められる。」という報告を経産省の課長さんがしたんですね。私は、「現在は」じゃないんじゃないかと。「現在は「注意深さ・ミスがないこと」、「責任感・まじめさ」が重視される」というけど、これは本当かって。今の段階で問題発見力は必要とされているじゃないかって。だから、日本は今、必ずしも先進国じゃないんじゃないのと、いろんな意味で、円安も含めてという話をしたんですね。だから、もう時代はどんどん先に進んでいるのに、日本は昭和のときの教育方針どおりやっているんじゃないのと、まじめに同じ堅実、右向け右みたいな教育をといった、もっと加速させな

いといけないという話をしたんです。

そのときに例に挙げたのが、先週行ったフィンランドで、企業とか会社で日本人もよく大学のほうに訪問に来るけれども、それで、なぜか日本人の特性として、こっちがいろんなところで議論しようって、お互いのためにと言っても、いや、自分にはそんな権限はないし、持ち帰らせていただきますとしか言わないって日本は。ほかの国はこうやって議論できるのに、何で日本人は、いやいや、僕はとにかくそんな権限はないけど、話は伺ったので持ち帰らせていただきますって。そうすると、せっかく議論しようと思って問題提起しているのに、そのまま話しただけで持ち帰られてしまったら、お互い切磋琢磨して何かいい産業を興そうとか、いいアウトプットを出そうとしているのに、話を聞いていると、むしろ日本って取り残されているんじゃないのかなと。

フィンランドというのは、どちらかというと世界でいろんな子育てが、ＩＣＴの分野とか、環境問題とか、ＭａａＳとか、いろんなことで前に進んでいるところではあるので、殊さらそういうところが必要とされるのかもしれないけれども、逆に言えば、一番誰かが言われたことを学ぶばかりで、参加するには後手、その世界から出ていかないなんてことをすごく痛感させられたことでありまして、あともう一個は、フィンランドで参考になったのは、すごく大学の中に小学生、中学生、高校生が頻繁にやってくるという話ね。だから、佐賀だったら、佐大とかそういったところに小学生がふだんから入り込んで、もっと先の教育というものに触れているというか、君は小学生だから、まだ３＋２とかじゃなくて、もっと先に向けていろんなことを経験させているという話を聞いて、だから、その辺りがいろんなヒントになって、やはり佐賀というのはこの国の教育を学制発布以来つくってきた県だから、俺たちでやらないと、指導なんとか要領どおりやっていたってこの国は直っていかないというようなことを感じたので、今日は部活の話ですけど、「ＳＡＧＡ部活」も今非常に動いている中で、じゃ、どうあるべきなのかと、我々自身も言われたことではなくて、自分たちの中で問題解決できるように、そんな議論をしたいというふうに思います。よろしくお願いします。

３　内容

（１）テーマについて説明

○前田政策総括監

それでは、本日の議事に入らせていただきます。

本日は「ＳＡＧＡ部活」の推進についての意見交換となります。

教育委員会におかれましては、部活動の地域との連携や地域移行について「ＳＡＧＡ部活」として推進をされております。それからまた、佐賀県ではＳＳＰ構想（ＳＡＧＡスポーツピラミッド構想）に取り組んでいるところでございますが、こうした中で、学校と地

域の連携を深めるということとともに、地域におけるスポーツ活動の体制を確保充実して、ＳＳＰ構想につなげていくにはどのような取組が必要になるのかといったようなことにつきまして、本日は意見交換をお願いしたいと思います。

それでは、落合教育長から初めに「ＳＡＧＡ部活」について御説明をお願いいたします。

○落合教育長

私のほうから簡単に「ＳＡＧＡ部活」について説明をさせていただきます。

昨年、部活関係者と集中的に議論をして、「ＳＡＧＡ部活」というのを提唱しました。

この「ＳＡＧＡ部活」のコンセプトというのは、子供たちがスポーツや文化芸術に触れる機会を確保したいということと、子供たちや指導者、それぞれの思いを形にした活動をしていきたい、そういうコンセプトで考えています。

「ＳＡＧＡ部活」では、学校と地域との連携が重要だといろんな提言をしていますけど、これまで学校部活というのは、学校の中で学校の施設を使って、その学校の生徒だけが参加できて、その学校の教職員が指導しているという、そういうクローズな世界でやっていたんですね。それがなかなか無理が来ていると。１つは、子供の数が減って、１つの学校でチームを維持できないような部活というのがだんだん増えてきているという状況がありますし、先生たちも時間外とか休日の活動になりますので、勤務時間が制限されてなかなかできない、あるいは専門の先生が学校にいない、そういった事情で、学校だけで成り立たせていくのはなかなか厳しくなっているという状況の中でどうするかということです。

国は今、部活の地域移行ということを言っていますけど、我々はそういうことではなくて、上のコンセプトのように、子供たちとか、あるいは指導する先生たち指導者のそういったものが実現できるような形に持っていくにはどうするかという議論をしました。そのために、やっぱり学校と地域がしっかりと連携する必要があるよね、学校部活だったり、クラブチームに代表される社会体育だってあるわけですけど、全体がしっかり連携していこうよということで、学校側でいえば、これまで学校だけでやってきた指導のどこに外部の人材を入れたり、あるいは単独の学校だけじゃ成り立たないんだったら、幾つかの学校で合同し合っていいんじゃないかと。また、学校の先生も地域にいて指導していいんじゃないか、そういうことを進めていこうよというのがこの「ＳＡＧＡ部活」です。

中体連が来年から学校だけではなくて、地域クラブ、社会体育側のクラブチームも参加できるように変わります。これは多分、中学校のスポーツシーンというのが大きく変わるきっかけになるだろうと思いますけれども、佐賀県としては、ＳＳＰ構想も進めていますし、こういうふうに学校、地域への区別なく、全体で盛り上げていくような取組をしていきたい。その応援ができるような枠組みというのを我々は政策的にもいろんな応援できる仕組みをつくっていきたいなというふうに考えております。

取りあえず説明は以上です。

○前田政策総括監
ありがとうございました。

（２）意見交換
○前田政策総括監
それでは、意見交換をお願いしたいと思いますが、この「ＳＡＧＡ部活」ですけれども、いろんなパターンがあると思いますけれども、そちらの説明をお願いしてよろしいですか。

○落合教育長
次のページ、これは一つ一つは説明しませんけど、一番上が従来どおりの学校部活、一番下がクラブチームと言われる社会体育、その間にはいろんなパターンがありますよねということです。
代表的な考え方でいくと、さっき言った合同型の拠点校方式で次にやってもらうと、こういうふうに一つの学校で全部のものをそろえることができなくなっているので、幾つか連携して、ある学校では、例えばサッカー、ある学校では野球、こういうふうにやって、この地域の子供は自分のやりたいことができる、こういう形に持っていこうとか、あるいは、融合型、学校拠点方式、地域拠点方式とありますけど、例えば、ヨットとかボートだったり、ある地域にそういう環境があって、そこにいろんな学校が来る、そういうのが地域拠点型。学校型で言えば、例えば、鳥栖高校の体操とか、そういう限られた学校に拠点となる施設があったり、指導者がいたり、そこにいろんな学校が来たり、あるいは小・中学生まで来るような、そういうふうなことが可能なんじゃないかとか、あるいは、公的な地域の総合クラブとか、あるいは民間の、いわゆる商業的なスイミングスクールとか、テニススクールとかあると思いますけど、そういったところで活動をしていくと。そういったもの全体を融合して、一つのフィールドで子供たちが活躍できるような場をつくっていきたいなと考えています。
以上です。

○前田政策総括監
ありがとうございました。

○山口知事
それぞれどういうやつをどう取り入れてもいいよということをやろうとしているんです

か。

○落合教育長
　そうです。

○山口知事
　自由にやって、これは市町単位――違う、学校単位か。

○落合教育長
　今まで学校単位だったものを、市町単位でもいいし、市町単位でも成り立たないようなところは市町が合同にしてもいいし。

○山口知事
　だから、さっきの共同校方式だと、ＡＢＣ合同チームという野球チームとサッカーチームがあって、Ａ、Ｂ、Ｃの学校の生徒は、学校が終わると野球だったらＡ校に集まるとか、そういうことですか。

○落合教育長
　そういうことです。

○山口知事
　というふうに選んでもいいし、学校ごとに、地域ごとにいろいろ考えるわけね。

○落合教育長
　そうです。状況はそれぞれ全然違うので、それぞれの実情に応じてやりましょうと。

○山口知事
　そこの時点で考えさせられるわけね。どういうふうにやったらいいのかという。

○落合教育長
　これまでは結構、学校部活の世界とクラブチームの世界というのは、大会も別だし、選手も相互乗り入れできない、指導者もなかなか学校の先生がクラブチームに指導できない、そういう溝があったんですよね。そこをある程度一緒に、シームレスにしていくことによっていろんな選択肢が、子供たちが自分の置かれている状況に応じて選択できるようにな

っていくんじゃないかと。

○山口知事
　そうすると、じゃ、これからは中体連の大会の中に、例えば、ＡＢＣ合同何とかチーム対民間の社会クラブである何とかスポーツクラブという対戦も見られるわけね。

○落合教育長
　見られるようになります。

○山口知事
　で、オーケーなんだ。

○落合教育長
　そういうことです。

○山口知事
　面白いね。

○落合教育長
　これまでは合同チームというのは、救済的には認められていたんですよ。野球でいえば、４人しかいない、５人しかいない同士で組み合わせる。10人いるところと２人いるところは組合せができないような、いろいろ制約があったんですよね。それが大分緩和されてくるので、合同チームも組みやすくなっている。

○山口知事
　そこに子供も関与できるんですか。どういう方式をするか大人だけで決めるんですか。

○落合教育長
　まだこれからの取組なので、そこはやっぱり子供たちの気持ち。

○山口知事
　そこの辺りのつくり方って実は大事で、俺も無責任なことは言えないけど、大人の都合でやるのか、でもみんなでどうあるべきか考えられるのかとか、いろんな論点がありますよね。

○落合教育長

確かに子供たちがどこと一緒にしたいとか、どういう範囲でやりたいとか、そういうのは大事になってくるかなと思います。

○山口知事

なるほど。

○前田政策総括監

ほかにどうぞ。

飯盛（いさかり）委員、子供たちの気持ちといいますか、思いというのは、部活動に対して、どういったことが多いんでしょうか。

○飯盛（清）委員

やっぱりいろんなタイプ、それこそ勝ちたい、優勝したい、中学校の普通に自分が進むべき中学校ではないけれども、あそこの部活が強いからということで、ちょっと戸籍をこそこそ動かして行くような中学生もいたりします。保護者もそういう子供に関しては同じような思いがあられるんですね。ところが、１つの部活の中で、そういう子ばっかりではないと。とにかく楽しめればいいとか、そういういろんな種類の子供たちがいますので、これが進んでいったときに、はっきり言って色分けをしておくべきではないのかなと。受け入れる側も、さあどこに入ろうかなと考える側も、ここはこういうのが目的なんだと。ここは本当に楽しくやるのが目的なんだと色分けをしっかり伝えておくべきではないかなというような気がしています。

現状では、勝利にこだわるというほうを例に取りますと、例えば、中学校であっても、ある程度部活の成績を残せば高校には行けるんだというような、私に言わせるとあまりよろしくない考え方の生徒も結構いますし、それからもう一つ、部活は長い歴史、ただという言い方は正しくないかもしれませんが、そんなにお金がかかるものではなかったというような意識ですね。これから先は社会体育なんかになると受益者負担というんですか、そこら辺りの負担が増えてくるということも考えられます。いろんなタイプ、いろんな保護者がそこに柔軟に対応していく必要があるんだけれども、私の考えとしては、先ほど言いましたように、はっきり間口を分けて考えたほうがいいんじゃないかなという気がしています。

以上です。

○前田政策総括監

加藤委員、この件はどうでしょうか。子供たちの思いというところで何か現場から感じることはございますか。

○加藤委員

そうですね。私は拠点校方式という、この３つの活動の方式に関してはいいんじゃないかなと思うんですけど、やっぱり子供たちの中に格差が現れるんじゃないかなというのはちょっと不安なところがあります。

そして、３つの活動方式の解決像、ゴールはどこにあるのかということがやっぱり定められているもののほうがいいんじゃないかなというふうに思うんですよね。解決像、ゴールはどこなのかという、一つ一つのＡ、Ｂ、Ｃの活動のゴールって同じなんですか。それとも違うんですかというか、そこら辺がはっきりしていると、そこからゴールを目指してどういうことをしなくちゃいけないのかというのが見えてくるんじゃないかなというふうに思います。

○前田政策総括監

ゴールというのは、子供たちがどうありたいかというところのゴールですか。

○加藤委員

中体連に重きを置く勝つためのゴールなのか、みんなが幅広く地域に移行してみんなが楽しめるゴールなのか、何かそこら辺が、３つあるというのはいいんですけれども、何か見えにくいというかですよ。そして、地域間格差もあると思いますし、子供の、やっぱり受益型になるんじゃないかなと思うので、そこら辺が、今の学校の中でやる部活というのはお金もかからなかったし、先生たちの負担は大きかったと思いますけれども、そこら辺の目指すものですね、何を目指してこれをやるのかというところがあればもっといいんじゃないかなと思います。

○落合教育長

今まで学校の部活動で非常に難しかったのは、子供たちがいろいろいる学校、特に中学校でいる中で、目指すところは本当にさっき飯盛先生がおっしゃったように、トップを目指したい子もいれば、楽しみたいだけの、そういう子も一緒くたに部活動をやるので、ブラック部活と言われたり、片方では物足りなかったり、そういう子供たちが一緒に活動していたというところが、こういういろんなバリエーションを持てるようになってくると、それぞれの目指すところに応じたクラブに、学校部活であれ、地域のクラブであれ、自分

の目指すところにフィットするようなところを選んで子供が入っていくという、選択ができるようになるところがメリットなのかなと。だから、それぞれのクラブによってどういうところを目指すのかというのをある程度見せながら、そこを子供たちが、あるいは指導者も選択しながら関わっていく、そこがこういうやり方のメリットなんじゃないかなと。地域全体で全体のニーズを満たせるようにしていく必要があるんじゃないかなと思います。

○山口知事

ちょっとこれは何か難しくて、俺には全然まだよく分からないんだけど、方程式が。もっと具体論と、じゃ、例えばさ、うちの子供は勧興小学校にいたんだけど、勧興小学校にいましたと。子供サイドからするとどういうふうに考えればいいの。どれかに決まっているわけ。向こうの神野小と一緒にこういうふうな方式を取っているとこの地区は決まっていて、その中でどれかを選ぶ、部活を選ぶということなの。それとも、自分たちも一緒に考えるわけ？生徒サイドからどう考えるかとか、これは何のためにやるのかとか、田舎のほうでやることなのか、佐賀市は関係ないのかとか、全然分からないというか、こう、コンセプト、考え方が。

○落合教育長

いろんなパターンがあり過ぎて、全体で見ると分からないんですけど、例えば、自分が行っている中学校、行くことになった中学校に何部が……

○山口知事

行くことになったというのは、学区があるから、うちの子供は成章中に行くわけ。

○落合教育長

その前提です。

○山口知事

成章中に行った。それで。

○落合教育長

高校だと自分で選んで行くと思うんですよ、部活をしたいならそれも含めて。

中学校だと自分の地域に行くのが基本です。

○山口知事
　じゃ、行くよね。

○落合教育長
　その場合に、行って野球したいけど、野球部がなければ、クラブチームを選択するか、その学校がどこかと合同でしていればそれに入れるし、もし部活がなければ地域のクラブに入っていくと。

○山口知事
　だから、選択が与えられていて、その地区地区で。伊万里なら伊万里でここにはないから、合同方式を取っているから、これになるか……

○落合教育長
　今までのクローズだと、自分の行った中学に野球がなければ、野球は諦めてサッカーをやったりとか、陸上をやったりするしかなかったんだけど、そこはもう少し選択ができるようにしていきたい。
　だんだん、どちらかというと子供が減ってくると各学校での選択肢というのは細ってくるので、そういう中でも選択できるようにしていきたいというのが我々の目指すところです。

○山口知事
　どういう方式を取るか決めるやり方というのはどうやって決めるんですか。

○落合教育長
　それぞれの学校だったり、地域の状況によると思うので、佐賀市みたいに規模の大きな学校だったら、それぞれの学校である程度は面倒見れるでしょうけど、例えば、町村、町になってくると自分の町の中に１校しかないので、ひょっとしたら隣と組んで何かをやるとか考えないといけない。野球部とサッカー部が１つの学校になかなか成り立たない。

○山口知事
　そうすると、県の教育委員会として今考えているのは、いろんな選択肢があっていいよと、自分たちで好きに、定食食べたかったら定食、アラカルトがよかったらアラカルト、それぞれ食べていいよってやって、あんまり介入しませんよというイメージ？

○落合教育長
　介入しません、まあ全体を応援しますよということですね。この場合、どちらかというと、教育委員会としては学校……

○山口知事
　だから、そこはもう崩しますということかな。

○落合教育長
　はい。

○山口知事
　だから、ある程度自由化を図りますということなのね、言いたいことは。

○落合教育長
　はい。子供も、指導者も、自分たちの目指すところと状況に応じて選択できるようにしていきたいと。

○進政策部長
　成章中学校に行って、野球をやりたいとなって、成章中学校にもある。あるけど、さっきも言っているように、ここはすごい勝利至上主義だから嫌だと。隣の中学校の野球部は仲良くやっているから、そこに行きたいと。そういうのもありなんですか。

○落合教育長
　今までの部活だと、隣の中学校の部活には入れなかったんですね。

○進政策部長
　ありにする。

○落合教育長
　地域化していくと、それは隣の学校からも受け入れるようになる。そこは、そこの学校がどこまで受け入れるか決めないといけないというところはあります。

○飯盛（清）委員
　学校の選択肢が任せられるんですけれども、よその隣の学校との連携とかになると、や

っぱり市町の教育委員会が音頭を取る必要があるんじゃないかなと。さっきちょっと体育保健課長とお話ししたんですが、そろそろ市町の教育委員会もそういうのを検討委員会というのを立ち上げてやっていこうというふうになっていて、そこでこんなのが提示されているけれども、うちはどれで行こうかみたいになると思います。

○落合教育長
　中学校でいえば市町、これは参考資料なんですよ、このパターンというのは。いろんなパターンがある中で、考えるときに、これを参考にしてどういうパターンがあり得るかなというのを考えてほしい。どれに当てはめていけという話じゃないんですよね。

○加藤委員
　まだ、今考えられるパターンということですよね。

○落合教育長
　そうです、そうです。

○加藤委員
　今からですよね。

○牟田委員
　今、サッカーにしろ、野球にしろ、何でも小学校でちゃんと地域と地域の社会体育じゃないですか。それが中学校になった途端にぶちっと切られたように、中学校の部活だけだよとなっているでしょう。サッカーなんかはＪ１のサガン鳥栖のアンダーとかで上がっていくけど、ああいうふうに、もともとある、今しっかりちゃんとバスケ、サッカー、柔道、剣道、何でも社会体育を中学でも高校でも通っていいよと、中体連、高体連もそこから出てもいいよとすれば、随分選択肢が広がる、今のままでも広がっていくんじゃないかと思うんですけどね。
　今、Ｊ２は、サガン鳥栖のアンダーとかあるけど、中体連とか出れない。

○進政策部長
　出れない。

○牟田委員
　そういうのをなくせば、上手いやつはそうやって社会体育でもいいし、下手なやつは下

手なのばっかり集める社会体育があるかもしれないし。今のを崩さずに、中学でも高校でも入っていっていいよ、中高も部活も出ていいよとなるなら随分違うんだろうと思うけど。

○落合教育長
　その辺をフレックスにすることによってチャンスだったり、選択肢が広がるんじゃないかなというのが考え方ですよね。

○山口知事
　大会に出れるようになるんだよね。

○落合教育長
　はい。

○進政策部長
　中学は出れるようになるんですね、これはね。

○落合教育長
　中体連が変わるというのは結構中学生にとっては大きな。

○山口知事
　そうすると、Ｕ－15に入っている、でも中学校も行っていいよね。例えば、昭栄中に行っているとか、そしたらどっちか選べるわけだ。

○牟田委員
　選べて出れるようにすればいいんじゃないですかね。

○落合教育長
　サッカーの場合、今もクラブチームと学校部活動と一緒に戦っているリーグだったり、大会があって、中体連以上に最後の全国大会に結びつく大会もあるんですよ。そういう環境がそれぞれの競技で整っていくと、隣の垣根って意味がなくなってくるので。

○山口知事
　なるほどね。だから、Ｕ－18のサガン鳥栖の人たちは龍谷に行ってるもんね、普通に学校には。だけど、龍谷サッカー部では出ない。

○進政策部長
　出ないです。

○山口知事
　で、それはぶつかることもあるわけ。

○落合教育長
　プリンスリーグでは、どこかの大津高校とかと試合をやったりしているわけです。

○山口知事
　だから、そんな雰囲気になっていくということか。

○落合教育長
　１つのモデルかなと。

○山口知事
　文化も。

○落合教育長
　多分、競技によってそれぞれ状況が違うので、工夫していかないといけないところですけどね。

○牟田委員
　県の柔道なんか、地元の道場とかでずっと中高とやりながら学校の代表でも試合するよね。

○落合教育長
　小学校はそういう状態で、中学に行くと部活に入るパターンが多いみたいです。道場で練習している子もいます。

○牟田委員
　道場で練習している子もいるんですよね。

○山口知事
　アメリカはどうなのかな。そんな感じですか。

○飯盛（裕）委員
　フットボールとかサッカーとかは、学校にありはしますけど、指導者は外から来ている人が多い。

○山口知事
　結構自由なんじゃないかな。

○飯盛（裕）委員
　自由は自由ですね。日本の……

○山口知事
　学校体育はこう、みたいなのは。

○飯盛（裕）委員
　ではないですね。

○落合教育長
　ヨーロッパは結構地域クラブ型ですよね。アメリカはどっちかというと学校型。

○飯盛（裕）委員
　学校のマスコットがいて。

○進政策部長
　大学もあれで盛り上がっていますよね。

○飯盛（裕）委員
　グッズとかまでつくっちゃいます。ヨーロッパは私、高校に通っていたので、思い出した限りでは、そういう部活動をやっている学校というのはない。
○進政策部長
　全部地域に。

○飯盛（裕）委員
　地域に。まず学校に運動場とかがない。私が行ってたところなんかないので。

○山口知事
　だよね、そういえば。

○飯盛（裕）委員
　街中とか

○山口知事
　うちって、必ずグラウンドが併設されていて、日本的だよね。

○落合教育長
　あんな広い体育館と運動場って、実は体育に必要というよりは、部活に必要なところはありますね、高校も中学も。

○山口知事
　ということを佐賀県だけじゃなくて、よその県もこういうことをやり出す方向なんだ、今。

○落合教育長
　やらざるを得なくなりつつあります。休日部活の地域移行とか、もう学校ではやらんよとか文科省が言い出しているので。
　我々は学校部活も含めて、成り立つんだったら続けていいんじゃないかと思うんです。だんだん苦しくなれば無理しないで地域の力を借りていいんじゃないのというのは我々の考え方です。

○飯盛（清）委員
　都会と違って、佐賀はそうなっていくときに心配なのは、人材不足といいますか、指導者不足があるだろうと思うので、私の勝手な想像なんですが、移行した後も学校の先生だけれども、指導をしたいという人が３割、４割はいらっしゃるみたいです。
　あと、もうこの際だから、すっぱり足を洗って、やったやった、よかった、本来の業務に専念できるという人も２割、３割、あとが状況に応じて、自分がしないとしょうがないだろうなという思いで今までの形を引き受けていかれる方が半分近くいらっしゃるんじゃ

ないかなというような予想ですね。

○落合教育長
　恐らく学校の先生たちも引き続き関わっていってもらわないと、多分、指導者の絶対数は足りないと思います。そういった人たちが参加しやすい環境を我々もつくっていかないと、先生たちがここで一気に手を引くと。

○山口知事
　そういえば、九州知事会議で文科省のマルヤマさんって人が、教員になりたがらないという話もしていて、特に北部九州の問題が出ていたんだけど、それとこれとは関係ない。

○落合教育長
　それとこれとは直接は関係ないです。一番深刻なのは小学校ですから、今の教員不足はですね。

○山口知事
　何で福岡とか佐賀とか長崎で先生になりたがらないのかな。

○飯盛（清）委員
　最近聞いたのは、教育学部で先生になろうと入ってきた人は非常にまじめな学生が多いと。まじめだから、まじめなほど、こういった現状は自分には無理だと。

○山口知事
　まじめだから。

○飯盛（清）委員
　考えてしまう。

○山口知事
　そのときにもう一つ報告されていたのが、教育学部ってすごい勉強させられるんだって、教育実習とかも含めて。それってちょうど公務員試験の勉強にいいから、県庁を受けるやつが多いって言っていた。

○飯盛（裕）委員
　役所を受けると。

○山口知事
　役所を受けるのが多いからおかしいって。あんなに教育の授業をやっているのに、何で県職員になるんだという話も出ていたね。

○飯盛（裕）委員
　やっぱり勉強してあるので、教養試験とかそういうのが。

○山口知事
　だから、すぐパスできるんだって。だったら、教員で大変になるよりそっちがいいやって。

○落合教育長
　まだ佐賀大学は教員になる率が高いので。

○山口知事
　それはすばらしいじゃん。だったら、例えば、その辺からちゃんと教員になってもらわんとね。

○落合教育長
　他県から佐賀大学に入った学生を佐賀県が採用せんといかん。佐賀大学が３割ぐらいなので、佐賀県立は。

○山口知事
　じゃ、そっちは見越して。
　そうすると、何となく分かってきたけど、じゃ、これはいつ頃からそういうのが始まるんですか。

○落合教育長
　大会を開くのは来年ぐらい、こういうのは一気には変わらないんでですね。

○山口知事
　来年の大会からは自由化はされるわけだ、大会自体の自由化。

○落合教育長
　中体連。

○山口知事
　ただ、そのときに、あんまり僕は賛成じゃないんだけど、全国大会とかやっているじゃんね。そこまで中学生でやらなきゃいかんのかと思うけど、そういうところの制限も外れるわけ。

○落合教育長
　まず全中が変わります。

○山口知事
　ああ、まず。そこからできるようになるんだ。

○落合教育長
　九州、県大会って、そういうレベルも変わるので。

○山口知事
　なるほど。だから、全中の優勝校が何とかスポーツクラブになってもいいということになるわけだ。そこまで変わるんだ。

○飯盛（清）委員
　それはあれですね。何々県代表、何々スポーツクラブ……。

○落合教育長
　もちろん、県での予選を経てですね。県とか九州大会を経て勝てばいいんですけど。

○山口知事
　そうすると、例えば、もし佐賀全体で今フェンシングが少しずつ増えているけど、中学校で社会体育でフェンシングクラブができたら、そこが何とか中学校じゃなくて。

○落合教育長
　今までだと、自分が所属している○○中学校の看板を背負わないと中体連に出られなかった。そういう人も多かったんですよ。クラブチームで練習しつつ、中体連には学校の看板を背負う。

○山口知事
　そうだよね。だから、今はフェンシングで、これは高校の話だけどね。佐賀商業が強いけど、佐賀西にいながら佐賀商業で練習しているやつがいる。

○進政策部長
　そうですね。

○飯盛（清）委員
　優勝するのは大体そういう子です。

○山口知事
　これはどうすりゃいいんだよ。

○落合教育長
　だから、中学校も高校もマイナー競技だと、みんな一緒に練習して、学校の看板を背負って出ている感じはありますね。そこはクラブで出るし、クラブでチームがつくれるようになると違うかなと思う。
　唐津のボートとかヨットもいろんな学校が来て一緒になって練習しているんです。ただ、インターハイに出るためには学校単位でしか組を組めないので、それぞれ分かれていくわけですよ。

○牟田委員
　僕が質問するのはおかしいけれど、中体連は来年ぐらいからってさっき小耳に挟んだけど、クラブチームとか、そういうのも混じってやるかもしれないんですか？。

○落合教育長
　そういうふうに緩和はすると表明しています。

○牟田委員
　高校はまだ。

○落合教育長
　高校はまだ。

○山口知事
　意外と中学のほうが先に行くんだ。

○落合教育長
　はい。高校は自分が選んで入れるから、入っているからいいだろうという考えです。

○山口知事
　そうか、そこが面白いね。中学が先に行くというのが。

○落合教育長
　将来は分かりませんけど、取りあえず中学。中学はやっぱり自分が選択して学校に行かないので、その学校の部活でしかやれないじゃないですか、原則。そういう中で緩和していこうということです。

○牟田委員
　高校は、じゃ、ＳＳＰカップに先駆けて、社会体育のチームを入れるの。余計なことを言いましたが。

○飯盛（清）委員
　高校は、特に私立がその部活で有名になって生徒を集めたりというのがあるから、今の形でずっと続いていくんじゃないかなという気がします。県立の部活の有名校が、さっき新体操の鳥栖高校なんか出ていましたけど、そこら辺りがどうなっていくのかなと思います。

○落合教育長
　今、我々が全国高体連に提案しているのは、合同チームをもっとフレックスにつくれるようにしたほうがいいんじゃないかということを提案しています。中学校みたいにクラブチームまで入るというのはまだ先の話になると思います。

○山口知事
　合同チームにね。

○落合教育長
　はい。

○山口知事
　唐津青翔のピッチャーとか、部員１人って。

○落合教育長
　今、野球でも結構苦しんでいる高校はありますよ、単独で組むのは。
　足りない同士だとものすごく離れたところのチームと組まないといけなくなったりするんですよね。

○山口知事
　唐津青翔はどっかと組んで合同チームで出たけど。相手側が今度は単独で出れるようになって、しょうがないから始球式だけやった。

○落合教育長
　４月に新入部員が入ってくると状況が変わるから、そこでチームが分かれないといけなくなったりいろいろするわけですよ。

○山口知事
　でもそれは一緒か、今回は。そのときによって合同の相手が変わったりとかはしてるんやろう。例えば、中学生。

○落合教育長
　中学校はその辺は緩和されて、そのままでもいいし、分かれてもいいし、ということになっています。

○山口知事
　すごいね。だから、変動要素がすごく増えるんだね。

○落合教育長
　はい。みんなまだどうなるかよう見えていない。

○飯盛（清）委員
　中学校の、特に体育の先生の話とかを聞くと、今まで部活動が生徒指導に大変効果があったと。それが地域に移行すると、学校が荒れる心配があるみたいなことを言う先生方は結構いらっしゃいますね。

○落合教育長
　スポーツを本来の姿として正しいかどうかは別にしてですね。学校の先生たちは生徒指導と部活動・スポーツをかなり関連づけて学校の中で指導されていたので、ちょっと心配されているみたいですね。

○飯盛（清）委員
　ある校長先生が言われていたのは、学校長が全校に話をすると、１つのことを、月の始めとかにですね。そして、学級で学級担任が同じ話を校長先生があんなふうに言ってただろうと。最後、帰る前に部活動の指導者が同じことを言うと徹底していくんだとのこと。

○山口知事
　具体論があるといいね、これね。具体的な事例が、こういう場合はこうやって救われる、こういう場合はリスクがあるとかね、何かね。

○落合教育長
　考えられることは網羅したつもりではあるんですけれども。どれに当てはめるというより、参考にしてねという。

○荒木委員
　難しいなと思うのが、もともと小学校からクラブチームとかに入っているエキスパートの方だったらいいんですけど、中学から初めてスポーツを始めるよというと、なかなか、もしかしたら素質があるような子もその中にいるわけで、その子たちが昭栄中に入りました、野球がしたいですと言ったときの選択肢をしっかりカラーをつけて提示できる人たちがどれだけ準備できるのかというか、そこが難しいだろうなというのは、母親としてちょっと聞きながら思いました。

○山口知事

これはこれとして考えてもらったらいいけど、俺も子供３人おったけど、中学に入るときにどの部活に入るかって結構いい加減で、たまたまそこにいた友達が吹奏楽に入るからって。「お前、吹奏楽やるのか」って言ったら、「一旦その雰囲気になるとなんか抜けられない」と。だったら中１のときのガイダンスを、あのあたりをもうちょっと、しかも中１になったばっかりで、不安でいっぱいで、友達がまだよく分からない段階で早く選ばせるのってけっこうすごくって、あの辺りをもうちょっと自由期間をもっと増やしたりして、これをしてもいいけど、いろいろしてやってみて決めるってやらないと。結構いい加減に決めてるよね。

○飯盛（裕）委員

心の隙を突かれていますよね。

○山口知事

そう。逆に言うとさ、そこを心の隙でいまだってなって、もう俺たちの仲間だってなって。

○落合教育長

介入する側はそれでいいですけど。

○山口知事

俺ですらそうなんだから。今はもっと不安。だから、あの辺りを充実させることとセットでやらないと。なかなか、ましてや社会クラブも選択肢があるわけでしょう。抜け切らんぞ、なかなか。だから、もっとある程度自由にしてやらないと。参っちゃったときに、部活を続けるって結構勇気が要るので。仲間、仲間ってやってるから。そのあたりの精神的なストレス。

○飯盛（清）委員

中学生全体の調査、数字ははっきり覚えていないんですが、部活で何を一番楽しみにしているかという中で、一番多かったのが友達との交流というところがあるみたいですよ。

○山口知事

いいほうも、悪いほうもね。

○飯盛（清）委員
　入るときも友達との関係で、競技よりも人間関係を優先すると。

○加藤委員
　何か部活で救われている子もいますよね。それが居場所となって救われている子供もいるので、部活を中学校から取ったら、もう授業と行事だけになってくるというのは私は心配だなと。子供の視点から見るとですね。これだったから学校に行ってたのにというふうな。

○進政策部長
　そういう子もいますね、確かに。

○加藤委員
　失われたらちょっと。

○荒木委員
　大学も今、サークルとかに入る子がすごく少なくなって、全国ニュースでも言っているし、おそらく佐賀大学でもそうだと思っていて、もっとほかのところで楽しむ場所が。

○山口知事
　何やってるんだろう。だけど、街を回るとバイトも減っている、佐大生が来ないって言っているよね。どこ行っちゃってるんだろう。

○落合教育長
　出なくなっているんですかね。

○進政策部長
　家にいる。ゲーム。

○山口知事
　一番多感でいろんな人との接触で、そんな時期にさ。

○落合教育長
　ここ二、三年は特にコロナで、強制的に籠もらされていたでしょうし、今の３年生ぐら

い。

○飯盛（裕）委員
　佐大のサークルの数が減ったって、学祭ですかね、学園祭ができなくて、そこで結構勧誘するんですよね、アメフトだったりとか。そういう機会がないから、もう所属しない子が多くなったというのは話を。

○落合教育長
　春先の。

○飯盛（裕）委員
　春先に。そしたらもう入る機会が、自分から探してこうというのはなかなかしないから。

○山口知事
　やっぱ春は大事だな。大事なことだよね。人と人がつながるのと、心を通じさせるのは。若いときにね。

○前田政策総括監
　「ＳＡＧＡ部活」ですけれども、今日の意見交換の中では、ＳＳＰ構想との連携というのがテーマにもなっています。
　それで、「ＳＡＧＡ部活」とＳＳＰ構想、重なる部分もあると思いますし、ＳＳＰ構想の一端を補うというか、そういう見方もあると思うんですけれども、その点、教育委員会としてどのようにお考えになったらいいのかという意見がございますでしょうか。

○落合教育長
　やっぱり「ＳＡＧＡ部活」、中高生の活躍の場ですし、レベルはいろいろ、下から上までいろんなレベルがあるんだけれども、そういうものとスポーツシーンを盛り上げていくＳＳＰ構想との関係というのは非常に強いだろうな。そこをどうＳＳＰに貢献できる形で「ＳＡＧＡ部活」を盛り上げていくか、それはこれからしっかり議論しながら形をつくっていきたいなというふうに思っています。

○牟田委員
　ＳＡＧＡ部活のＳＳＰ杯はないのかな。

○落合教育長
　確かに垣根がなくなったようなものに、そういう形があったらいいのかなという気はしてますね。

○牟田委員
　ゴルフのオープンみたいなやつは、プロもアマも入って。

○山口知事
　SSPカップって高校で？

○牟田委員
　高校で。

○山口知事
　例えば、中学校と佐賀東をサッカーで対決させるとか、そういうやつ？俺はいいいと、かまわないと思う。

○落合教育長
　そういう融合したものにそういう、理念と合致するところがあるので、そういうのはありかなと。

○牟田委員
　佐賀独自じゃなくて。

○山口知事
　独自のやつをつくっていけばいいと思うけど。それはこっちでやるのか。大会をつくるとか。

○落合教育長
　いずれにしても、これは社会体育側も絡んでくるので、教育委員会と事務局としっかり連携しないとできないかなということですね。

○飯盛（清）委員
　昨年の東京オリンピック、日本の成績が随分よかった。特に女子のバスケットの話を聞

いたんですが、下部組織の指導者がしっかり計画を立ててやってきた結果があのメダルに結びついたと。それぞれの競技もやっぱり同じように、地域のスポーツクラブ的なところがずっとやってきていると。これは成果は出てきているのは間違いないということだから、部活動の移行も、さっき一番最初に言いましたように色分けをして、そっちのほうが上を目指す人たちも大事に伸ばしていかないといけないでしょうし。

○牟田委員
　やっぱりサガン鳥栖が強いのと一緒やね。バルーナーズもこれから強くなっていって。

○山口知事
　下が強いとね。
　サガン鳥栖なんて九州中から集めてくるもんね、15、18をね。

○牟田委員
　野球もそういうふうなのが出てくればね。

○山口知事
　そう。みんな各スポーツで、今はもうレスリングとかはなっているしね。
　柔道とか、女子柔道とかも佐賀商業は県外から入ってくるし。

○落合教育長
　ああいう高校でそういう実績を出しているところって、小・中学生の育成のところからもう少し高校が地域を受け入れていったほうがいいんじゃないかなと思ったり。

○山口知事
　指導者が足りないかな。女子柔道もそうだけど、指導者が来てくれると、例えば、国スポで終わりにしようと思っていないので、ＳＳＰで。だから、ずっといい指導者がずっと来てくれるんだったら、そういうのにお金かけるのはいくらでもかけていいと思うので。

○落合教育長
　スポーツ選手のセカンドキャリアとして一番いいのは、その道の指導をする、そこで生活が成り立てば、一番彼らも望む道だろうと思います。そういう道をたくさん準備できれば、佐賀に集まってくれる気になるんじゃないでしょうかね。

○山口知事
　サガン鳥栖もＵ－18、Ｕ－15のディレクターって、大体佐賀の方だもんね。佐賀の子がみんなそのままコーチ、監督をやっているんですよ、ユースの。だから、すごいいい、あの仕掛けがいろんなスポーツでできていけば、みんな飯食っていけるし、まさにＳＳＰそのものですけれども。
　中学校は自由化するわけね、簡単に言うとね。

○落合教育長
　そうです。

○山口知事
　だけど、今の話で問題点って考えとかんばっていうか、俺たちは応援するけど、こっち側、教育委員会じゃない俺たちが考えることって何だろう。

○落合教育長
　今、最大は、学校で成り立っている文化があるので、それを自由化していくんですよというのをみんな分かった上でいろいろ考えていくから、学校側の教育委員会の取組というのは非常に重要なんですけど、そこから先は地域との社会体育との連携になっていくので、こっち側の受皿のところは事務局のほうとしっかりと。

○山口知事
　うち県の教育委員会は、そこそこ柔軟になっているけど、市町って固いぜ、教育委員会。言っちゃ悪いけど。だからそことの関係じゃない、意外とさ。ここの後ろの人たちはさんざんおれともやってるからさ。多少ここら辺がこうなっているけど。
　あと、中学生って基本的に義務教育だからさ、市町やん。だから、そこの関係が落合さんの腕の見せ所だと思うな。

○落合教育長
　ポン、とこうは変わらないと思うんですよ。徐々に何年かかけながら、ああ、そういう世界もいいのかなと思ってもらいながらいくしかないかなって。

○山口知事
　そうだね、無理にするとあれだから。

○落合教育長
　強引にやると非常に問題になる。

○山口知事
　基本的にさっきの話じゃないけど、やっぱりこれからこういう選択の時代になってくるからさ、上からこう言われてそれをやるという社会じゃないので、みんなでいろいろなことを試行錯誤しながら、いい感じを目指していこうねってみんなにアドバイスしないと。多分、ほら違った、ああした、問題が起きたと、がちゃがちゃして、そこにまたマスコミが輪を広げてとなるので、試行錯誤するしかないと思うんだ、こういう問題。

○落合教育長
　成功事例でいい状態を見せて、ああ、ああいうやり方いいねって。

○山口知事
　いいねっていう例も出てくるからね。

○落合教育長
　それしかないと思います。

○飯盛（裕）委員
　まさしくこれですね、「注意深さ・ミスがないこと」、「責任感」。

○山口知事
　書いてあるだろう。

○飯盛（裕）委員
　知事が言われたことがそうだなという。

○山口知事
　それで大丈夫かなこの国はって思うときがあるけど、今はそうだって。
　現在のって、記者もそう？同じ？「注意深さ・ミスがないこと」、「責任感・まじめさが重視される」って本当か。

○飯盛（裕）委員
　でも人間ってミスするじゃないですか。だから、ミスから何を学ぶかどうかが大切だと思います。

○山口知事
　特にガキンチョの頃はそうだよね。ああ間違った、失敗した。でも次は頑張ろうって、それを最初からこんな「まじめさ」、「ミスがない」とか、こんなこと言われたら、とても成長…エンジンを降ろすようなものですよ。

○牟田委員
　エンジンがそもそもない。

○山口知事
　ないよね、こんな人は。

○落合教育長
　今ミスを許容しない雰囲気があるじゃないですか、世の中に。

○山口知事
　この国はね。

○落合教育長
　はい。叩かれて。

○山口知事
　そこはもうちょっとこうみんなで。

○落合教育長
　達成はせんといかん。次のチャレンジをこう、そういうチャンスを提供して。

○山口知事
　さらに今ＳＮＳで叩かれてさ、この人こんなことしてっていうのもあったりとか社会監視も強いから。ここを本当さ、社会全体で考えていかないと。やべえよなと俺は思ってる。

○落合教育長
　来年の我々の教育委員会の目標は、子供たちに考える、それを認めて、褒めて、育てていく、そういう形でたくましい子供に育てたいなと。

○山口知事
　それもそうね。やっぱり先生が尊敬される人間になってほしいけど、尊敬を押しつけるんじゃなくて、自然と尊敬されるようにならなきゃいけないので、先生だって100％正しいわけなかろう。俺だって、今100％正しいと思ってなくてしゃべってる。みんなそうだよね、人間だから。常にこうだよね。だから、そこの上で尊敬されれば一番いいわけだからという理想を追い求めてほしい。先生だから従いなさいじゃなくて。それで少し裏づけるところだけは柔軟になっていっている。

○飯盛（清）委員
　さっきの失敗を許さないという話の中で、ある教員が今日言っていたのが、
一人の生徒を、生徒指導上のことで複数の先生が叱っていた。その間中、生徒は無反応だった。
でも、自分が少し優しい言葉をかけた途端に泣き出した・・・。そこから学んだのが、人は怒られている時、厳しく怒られている時は反省しないんだ、反省するのは許された時。

○山口知事
　言い得て妙ですね、それは。

○飯盛（清）委員
　なかなかいいこと言うなと思って、メモしたんですけど。

○山口知事
　ほろっとするからね、やっぱね。

○落合教育長
　責められるとこうなりますからね。

○山口知事
　守るからね、特に今の時代。
　そうやってみると、先生ってすばらしい仕事なだけに、もっと価値を上げてあげなきゃ

ね。もともとそうだよね。先生の影響って大きいよね、俺たちいい大人になってきたけどさ。やっぱりあのときの先生はこう言ったとか、ああ言ったとか、ああしてくれたとかさ。

○落合教育長
　先生の授業は確かに大変だけど、大変なところにだけ焦点を当てて、ブラックって言われるじゃないですか。そこはすばらしい仕事だよというところを。

○山口知事
　そこをもうちょっと、ちゃんと真っ正面から焦点を当ててほしいよね。だから、こういう人がいたからこうなったというのもいっぱいあるんだけど、なぜかそこにばっかりが焦点が当たるから。

○飯盛（清）委員
　結構、現役の人も生まれ変わったらまたやるという人は結構多い。

○山口知事
　先生っていう仕事は大変ですよね。

○飯盛（裕）委員
　日本の先生たちがやらないといけない仕事の量って、何かちょっと多過ぎるような気がしないこともないですね。
　前も多分話したと思うんですけど、グレンズフォールズ市と佐賀市が交流しているじゃないですか。で、うちの実家で先生たちホストがいないから、とうちの実家で預かったんですけど、ずっと交流していて、先生たちは夕食のときに帰ってくるじゃないですか。某中学校はずっと残っていて、あの先生たち何で遅くまで働いているのと。私たちは４時、５時で帰るのにって。何をそんなにしないといけないのかというのがあまり理解できなかったみたいですね。

○落合教育長
　学校とか先生に対する期待がすごく大きくて、それに対してすごく応えてきているわけですよね。そこはちょっと過剰になり過ぎているんじゃないかなと。

○飯盛（裕）委員
　保護者対応が、学校が持っている保護者対応があまりにも多過ぎるような気がします。

○牟田委員
　だから、いつもそれはしよるやん。

○飯盛（裕）委員
　そうですか。

○牟田委員
　親が学校にばっかり求めるから。

○飯盛（清）委員
　今年採用になった小学校の教員が２人、９月だったか、面談をさせてもらったけど、あなた方が入る前、もう大学卒業してストレートで来ている、入る前にイメージしていた学校の先生という仕事というのが、今やっている現実の何％ぐらいって聞いてみたら、２割か３割ぐらいと言いました。それ以外は、こんな大きな、こんな仕事があるなんて分からなかったという、決してオーバーじゃないような気がします。

○落合教育長
　その状況も変えていかないとですね。

○飯盛（清）委員
　それが、必要なものももちろんあるんですよね。成績にしろ、何にしろ。保護者との必要最低限の面談とかも必要なんだけれども、それ以外のものは、やっぱりそんなことは想像していなかったと。

○山口知事
　どうなんだろうね。子供の自立性という意味で、日本人は親とか学校の関与が大きいのかな。

○飯盛（裕）委員
　学校の中のことをいろいろ欧米は自分たちで決めましたよね。ルールだったりとか、政府が教育費をカットしますとかもすぐデモに行きますし、自分たちで何かそれに反することがあったら主張する、それが認められるような環境ではあるかな。

○山口知事
　何か外国は子供がもっと大人なような気がするんだよね。自分で判断させられているというか。

○飯盛（裕）委員
　ちゃんと主張します。

○山口知事
　主張もするし。だけど、何となくうちの場合は、まさに保護しているというか、それが強くて、その辺りに影響しているのかなと。子供って、子供だから。別人格がある。それこそ就職してからまで親が介入するってあったけど、なんかその辺りが構造的な問題かな、一つの。

○落合教育長
　もっと子供に考えさせたり、判断させたりしていいんじゃないかなと思うんですよね。

○山口知事
　そうすると、保護するという、学校が保護する、親が保護するというところが、ちょっと少し、子供は子供だからというところがあって、それをがーってこう取り囲んでやろうとすると、この分って仕事だよね。ちょっとよく分からんけど、俺は専門家じゃないけれど。

○加藤委員
　何か信用できないのかなと、子供を。

○山口知事
　子供を信用できない。なるほど。

○加藤委員
　多分、もっと信頼して任せたらいいのに、失敗したときにフォローすればいいんでしょうけども、心配でしょう。

○落合教育長
　先に心配して、失敗しないように。そういうのはあります。

○山口知事
　子供が誰か机の下にさ、小学生とか幼稚園生が潜ったら、潜らせておけばいいと思わない。

○加藤委員
　はい。

○山口知事
　そんなところにいたらいかんって一々やらなくてもさ、いたいところにおったらええわけでしょう。本人はそう思っているわけだから。

○加藤委員
　いるのには何か理由があるんですよね。

○山口知事
　そう。

○加藤委員
　だから、その理由も聞かずにこうしないとだめよというのは、子供の気持ちに反しているという。

○山口知事
　そう、俺はまさに賛成で、だって別の人格だし、自分の子供でも考えてるからいろいろさ、ああ、そうかいと言ってやらんとさ。無理だから。

○加藤委員
　そうなんですよ。そこで無理やりちゃんとさせても、また次のときもそうするという、多分その繰り返しなんじゃないかなと。

○山口知事
　結構本質突いていると僕は思うんです、この問題を。

○飯盛（清）委員
　保護者も教員も、忙し過ぎてじっくり考えさせるという時間がなかなか取り切れない。

○山口知事
　だから、悪循環しているんですよ、そこが。

○飯盛（清）委員
　何でそんなことをしたのと黙って考えているときに待てばいいんだけど、これね、これねというような選択肢を用意してあげて、結論をとにかく急ぐ。

○山口知事
　ああ、それはいかんよね。

○飯盛（清）委員
　もう子供はとにかく早く終わりたいから、適当に答えて進んでいく。もうしなさんなよ、分かったで終わり、何も分かっていないというが現実じゃないかなというところ。

○加藤委員
　でも何でこんなことしたのというと、何か子供としては責められているような感じなんですよね。こうしたのは何か訳があったんだよねと聞くと、少しこう、ああ分かってくれてるって子供が思うというような、言葉のちょっとしたかけ方でも違うというようなことはありますよね。
　だから、WhyよりHowで聞くという、いかにしてこれが起こったのかという。

○山口知事
　その辺ってどうやったら保護者層というか、親に分かっていただけるのかなって。でもそれって難しいよね。

○加藤委員
　難しいですよね。

○荒木委員
　やっぱり親にも、母親にも世論が社会がちょっと厳しいというか、例えば、ゆめタウンとかで走っていると、冷たい目線を浴びさせられちゃうから、急いで「もうやめなさい」

と言って囲ってしまうとか、それこそ親もミスがない親にならないといけないという期待もあるのかなと思ったりはしていました。

○落合教育長
　世の中全体に対するキャンペーンを我々は張りたいなと思っていて。認めて、褒めようキャンペーン。

○山口知事
　それいいよ、それ。

○落合教育長
　と思っていたんです。

○山口知事
　特に小さいうちってすごく大事だよね、それ。大分違うと思う、それで。
　そうすると、いろんなことがもうちょっと、仕事も楽になるし、子供は成長するし、新しい時代にもマッチングしてくるし、こういうことに対する包容力も増えてくるしって、だって、子供だもんねって。子供に判断して決めてもらうって、子供も結構大変なんだけど、それって必ず経験の蓄積で次に生かされるから、そういう姿を自分で考えるっていう方法に持っていくというか。

○加藤委員
　何か優しい佐賀県になりたいですね。

○山口知事
　そう。だから、一つのヒントは、この前、移住してきた人たちが、だって、名古屋でラーメン屋に行ったって、子供がいるとみんなすごい目でにらまれて、子供の席すらないのに、佐賀に来るとラーメン屋に子供の椅子が置いてあるって、だから佐賀に来られて。
　だから、でもそういうふうにみんながそうなっていけば、みんな。そう言ったのを名古屋にいると、子供はラーメン屋に連れていけない。連れていくと、泣くとみんながわーっって言うから、ちょっと何か悲しくなるよね。社会でそういう雰囲気を佐賀県は増やしていけば。

○加藤委員
　本当ですね、温かい、優しい佐賀県。

○山口知事
　僕らもハッピーだしさ。

○加藤委員
　そして、子育てもしやすくなるという、なんか、いい循環が生まれたらいいですね。

○山口知事
　そうなんですよ。そこは大事。

○落合教育長
　大きな話ですけど、大事かなと。

○山口知事
　佐賀県庁は割と知事会でも自由にしている。自由から何かが生まれるよね。

○前田政策総括監
　そろそろお時間でございますが。

○山口知事
　何となく大事なことがちょっと見えてきている感じがする。

４　閉会
○前田政策総括監
　ありがとうございます。よろしゅうございますでしょうか。
　それでは、以上をもちまして、会議を終了させていただきます。本日はありがとうございました。